

平成29年度 能美市立福岡小学校 学校評価 最終版 平成30年1月

重点目標 (めざす姿)	取組状況	評価	今後の改善策	学校運営協議会による評価・感想
1 組織的な学校運営	【教職員①100%】 あがった 校訓「誠実・自強・規律」の見られる姿をゴールとし、学期ごとのキーワードを決め重点的な取組のPDCAを試みようとしてきた。ロードマップの意識化にはつながったが、各取組のC(評価)の視点について共有化が十分でない点があり今後の課題である。	A	次年度に向けてロードマップの見直しをする際に、重点的な取組の評価の視点を決め、計画的・組織的によりよい学校運営の積み重ねが実現するように、運営委員会を中心に協議・準備する。	校長ビジョンが校内・各分掌での活動に意識化され組織的に教育活動が運営されていると感じている。ただ、全てのCS委員まで十分浸透されていなかったと考える。 ⇒目標・ビジョンが共有された組織的運営の継続が大事である。今後も「校訓」・ふくおかの品格」の具現化を目指して一貫性をもって子どもたちのために取り組んでほしい。
	【教職員②100%、児童①92%】 あがった 2学期「一人一人を大切に」というキーワードのもと、児童会主催の人権集会では「心無い言葉が友だちを傷つけ、いじめにつながる」という趣旨の啓発を行った。その他、安全・安心な学校生活のためのルールの徹底や体育を中心とした安全指導を実施してきた。	A	登校時は管理職を中心に玄関や通学路で児童の状況を見極め、不安が見られる児童に対しては、担任・保護者へ必要に応じて専門機関とつなぎながら早期で適切な対応に努めてきた。また、いじめに関わるような案件が見られる場合も生徒指導主事を中心に組織的に聞き取りや指導を行ってきた。今後もチームでの早期適切な対応を準備し実施する。	前期以降のいじめの対応はどうか。 ⇒2学期以降、深刻・継続的な案件はないと捉えている。ただ、「ちよつとしたトラブル」と軽視せず、アンテナを高くし、気になる事案については、報一連一報を密にして組織的な対応に努めている。
2 (確かな学力の育成)	【教職員③100%、児童92%、保護者②88%】 あがった 夏季休業中に、浜小と互いの国語と算数の授業実践を板書を通して交流した。また、9月に「ふりかえり」についての校内研修を行い、ふりかえりの意義と効果について共有し実践している。また、授業研究から指導案作成→授業実践後のふりかえりを低中高部会を中心に行い、系統性を意識した授業改善のポイントを積み重ねている。	A	3本の矢については、教職員一人一人が各自の課題意識をもっている。3学期は、自己の課題についての改善方法を研究で実践してきたことを基に考え、実践し、その検証を交流する。その経過・結果を職員同士で学び合う場を設け、「教員の自覚化」をすすめることで授業改善につながる。	学力の育成について学校に任せる部分が大きく、具体的な姿がつかめていないが、「地域ぐるみで子どもを育てる」というスタンスを持ち、今後の共有化・具体化の検討が求められる。その際、効果的なAIの取り入れ方など先進的な分野についても本校の具体的な方策を協議検討してほしい。
	【教職員④100%】 あがった 朝自習、チャレンジ学習とも担当級外と2人体制で指導を行ってきた。チャレンジ学習は、前年度実践を参考に、活用問題に焦点を絞って効果的な指導法を模索し習熟度に応じた指導を行う。朝自習については、内容によっては習熟度別で指導を行うなど、基礎的知識・技能の確実な定着に努める。	B	今後も担当級外と連携を密にし、2人体制で指導を行う。チャレンジ学習は、前年度実践を参考に、活用問題に焦点を絞って効果的な指導法を模索し習熟度に応じた指導を行う。朝自習については、内容によっては習熟度別で指導を行うなど、基礎的知識・技能の確実な定着に努める。	また、学習面的な方針が大事であるが、『好奇心』や『興味』を持つことこそが、将来「生きて働く学力」に大きくつながるものである。そのことを考慮して、共に児童育成にあたっていきたい。
	【教職員⑤100%、児童③85%④97%】 あがった 国研「映像資料」を全職員に配布し、本校児童に合った効果的な言語活動を考える機会を設けた。低学年は友達への考えを理解するために聴く、中学年は自分の考えを広げる。高学年は自分の考えとの違いに気づき、自分の考えを深めることを意識した授業実践を行ってきた。	B	全学年、「聴く」ことはできてきているが、自分の考えを根拠を明確にして伝えるように話すには至っていない。また、友だちの意見に対し問い返すなど対話的な交流活動には課題が残る。コミュニケーションに関する研修や指導を教職員、児童ともに深めていく必要がある。	
3 徳(豊かな心の育成)	【教職員⑥92% 市100%】 さがった 市もAはさがった 5年・3年等の評価問題の結果をもとに学力向上プランの見直しを行い、本校児童に足りない力と教職員が意識すべきことを共有した。この後の文削除	B	すぐに伸びが自覚できる力ではないため、「目的や条件に合わせて書く力」の育成を中心に、児童自身が必要感をもって主体的に取り組めるように仕向けていくことが課題である。この後の文削除	
	【教職員⑦100%、児童⑤87%⑥87%保護者⑥90%】 あがった 各学級のQUの結果を、担任以外の職員も含めて分析を行い、2学期の学級経営方針を決めて取り組んだ。10月に実施した第2回の結果や子ども達のアンケートを見ると、徐々に親和的な学級へ向かっていることが感じられる。	B	徐々に結果が出始めてきていて、各学級の雰囲気も良い。3学期にもQUを行い、よりよい取組の継続と積み重ねを意識して次年度へ進級させるという視点でふり返り各学級経営の方針を立てる。	「熟議」にあがったが、「根はいい子だが、自分を出し切れない」というゆかしさや甘さが今後の課題の一つである。
	【教職員⑧100%、児童⑦92%】 あがった 掃除のリーダーとしての経験が、委員会や集会など、様々な活動への意欲につながっている。2学期に入ると、慣れからの緩みも見られたが、服装や終礼の指導等、職員の関わり方について再確認することで、子ども達は再び意欲的に取り組めるようになってきた。	A	今年度初めて取り組んだ縦割り清掃は、児童の心の育成に効果的であったと考える。この良い雰囲気、次の学年にうまくバトンをタッチしていくことが大切である。掃除や委員会等、5年生のリーダーとしての見習い期間を設け、6年生にサポートしてもらおうという場面を持つことにより、互いの自己肯定感の高まりにつなげたい。	人とつながり、よりよい社会をつくるために、いろいろな価値(多様性)を理解し、その上で自分の考えを創造・表現し、仲間と共に「熟議」しながら最善解をめざす人間性(社会性・人を思いやる人間性)を、地域・家庭・学校が協同して育成していけるように、計画的・継続的な取組が期待される。
【教職員⑨92%、児童⑨82%(保護者⑥78%)】 教職員増 他は同じ 学年ごとに担当月を決め、「道徳コーナー」と決めた掲示板に道徳の実践を掲示した。また、次年度の道徳教科化に向け、指導主事を招いて研修会を開き、年間指導計画の見直しを図った。	B	教職員の道徳に対する授業改善の意識が高まったが、道徳科の評価について教職員が研修する必要がある。また、教科としての道徳を中心に、全ての教育活動を通して道徳的実践力が身につけているかどうかを見守る意識も大切にしていかななくてはならない。	そのなかでも、「特別な教科 道徳」と言われるが、具体的な内容は家庭・地域に伝わってこない。子どもたちのためにどのように進めていくのか、学校の発信に期待するとともに、地域人材の活用や地域教材の開発など、地域が生かせる場を工夫できるとよい。	
4 体(健全な身体力の育成)	【教職員⑩100%、児童⑩82%(教師③100%)】 あがった 読書月間に教師のおすすめ図書の紹介を行った。興味を持って読む児童を、低・中・高学年用に分けて行うなど他校の取組も参考に、興味を持って読む児童をさらに増やしたい。	A	図書ボランティアの数も増え、内容も工夫して下さっているが、読書の興味には個人差が大きい。好評だった教師おすすめ本紹介を、低・中・高学年用に分けて行うなど他校の取組も参考に、興味を持って読む児童をさらに増やしたい。	また、子ども自身がどう考えているのか、子どもの考え・意見を聞き、意図や目的によっては「子どもも共に熟議する」という場も必要と考える。
	【教職員⑪100%、児童⑪94%】 あがった 鉄棒の取組や持久走大会など、目標を明確にして取り組んだことで達成感を感じる児童が多くみられた。また、準備運動の代わりにサーキットトレーニングを取り入れることで、短時間で効率的に筋力トレーニングと有酸素運動をすることができ、体力向上につながっている。	B	目標を達成できない児童は、日常的な運動習慣がない場合が多いので、体育の授業だけでなく休み時間の過ごし方についても、体力向上に視点を置いた声かけや取組を考えていく。	個々に目標をもって取り組ませる取組は効果的だと考えるので、「目標に向かって努力する」大切さを意識させ、様々な面で活用してほしい。
	【教職員⑫100%、児童⑫96%】 あがった 水泳の時期には2学年の体育の授業を合わせたり、管理職や支援員のサポートを確保したりと、より多くの目で事故防止に努めることができた。また普段の体育授業でも、器具の準備や場の設定の安全だけでなく、マット運動の際の赤白帽子や上履き等安全に配慮した服装を指導して取り組んでいる。	B	今年度の成果を、教職員の異動があっても安全に関する意識の高い指導を継続できるように、共通事項を明記して引き継いでいく。	安全な活動についてCSでも協力してきたが、事故・けがはゼロにはならない。地域・家庭でもさらに声掛けを行ってほしい。
5 家庭・地域との連携	【児童⑬81%、保護者③70%④77%】 微減 10月にメディアコントロールと並行して早寝週間を行った。8割程度の児童が早寝を達成することができた。普段よりもテレビを見る時間などを意識したり、早寝をするために時間管理を行っている様子が見られた。習い事などどうしても早寝ができない児童の目標達成が課題である。	B	3学期では時間の使い方を意識させるために、家庭学習週間と同様に早寝週間に取り組む。また、前回の取組で早寝の目標を達成できなかった児童には個別に生活習慣の状況を確認し、指導を行ってから全体の早寝の取組に挑戦させることで固定化を防ぐ。	メディアコントロールや食育については、家庭(地域)での取組が求められるものである。学校の取組を生かせるようにしていきたい。
	【教職員⑭100%、保護者⑤68%⑥91%】 あがった 「親子クッキング」等親子の取組では3年目ということもあり、家庭教育力の向上が図られた。2学期には「こころの花束コンサート」や学校行事へのCSの参加を盛んにすることで家庭でも地域でも話題となる学校づくりを進めた。	B	保護者アンケートのご意見の欄には、昨年度以上に学校に対して肯定的な言葉や感謝の言葉が寄せられている。あいさつについては、保護者自身がわが子・わが地域の課題と感じている。3学期は児童発信の取組を試行し、次年度初めから計画的・組織的に進められるよう工夫していきたい。	今年度CSスタートの年として、学校とつながる意識が高まったと考える。今後も保護者・地域が学校の取組に関心をもって「町の宝」である子どもの育成にあたり、また、地域への愛着が高まるようお互いに工夫していきたい。 ⇒たとえば、地域の企画に子どもの参加を要請するなど。
	【教職員⑮100%】 同じ CSの方々がディレクター中心に各種行事に来校され、学校の持つ課題についても理解を示し、支援して下さる方も増えた。また、学校便りを作成、各町で回覧して頂くなど学校から地域への発信の仕方を工夫してきた。【運営協議委員の方のご意見】	A	子どもを核として、学校—地域—家庭3者が協働しあえるよう、一方通行ではなく、双方向の手立てを探っていく。そのために、多様な方の思いを「聴く」学校、課題を「隠さない」(改善を目指す)学校を意識する。今後も、学校からも地域への積極的な発信の仕方を工夫する。	浜小学校など、他校のCSとの連携を図り、中学校区単位でつながりを深めていくように。  CSディレクターとしてCSアクションプランを策定し、「地域の力」を生かした子どもの育成を具現化していきたい。